児童・青少年の美術活動を支える民間事業・地域施設の日独比較

梨本 加菜（児童学科・教授）・山成 美穂（短期大学部初等教育学科・准教授）

1．本研究の目的・2021年度の状況について

子どもが生涯にわたり美術に親しむ素地を育み、専門教育の場となり得る日本の学校外の美術教室や施設の実践は、「生きる力」や自己肯定感の育成の観点から、社会において欠かすことのできない有益なものであると考える。特に非認知能力の育成は、近年、「STEAM 教育」やキャリア教育等で社会的に注目されている。しかしながら、それらの実践の実状は明らかではない。

2021年度より 3 年間にわたる本研究は、日本における子どもの美術活動を支える地域の民間事業や施設の基礎研究とアンケート調査及び訪問調査による実態把握を目的とし、子どもを対象とする社会教育としての美術教育において先進的な活動を展開しているドイツとの比較研究を特徴とする。本研究は、社会教育の視点から主に日本の状況に注目してきた梨本と、ドイツの社会教育分野における児童・青少年への芸術教育の調査研究をしている山成による共同研究であり、美術活動を行う公設の青少年教育施設を有するドイツの実践との比較によって、地域における活動の展開のための示唆を得ることを最終的な目的とする。

初年度となる2021年度は、文献による基礎研究をふまえ、優れた実践が認められる日本の学校外の美術教室・事業者・施設へのアンケート調査を実施し、実態把握を試みた。

2022年現在も新型コロナウィルス感染症の猛威は収まらず、本研究は訪問調査の延期等の計画変更を余儀なくされた。芸術文化活動そのものへの打撃も懸念される中で、アンケート調査で多くの目を見張るような実践を見出すことができ、この機会に感謝している。

2．アンケート調査「児童・青少年の美術活動」アンケート調査　中間報告

（1）調査方法・結果の概要

本研究は先導的または萌芽的な、優れた実践が認められる地域の美術教室や関連施設等へのアンケート調査を行い、実態把握を試みた。文献、Web サイト等で確認した情報を元に全国51件の事業者・施設を抽出し、2020年10月～12月に電話、またはメールで調査を依頼し、承諾が得られた場合に書類を郵送し、37件の回答を得た（2022年 1 月現在）。

回答者の所在地は都道府県別で東京都17、神奈川県11、千葉県 3 、宮城県 2 であり、北海道、三重県、和歌山県、山口県、大分県、沖縄県は各 1 件である。アンケートは、パンフレット等で代替できる回答内容は省略可としたが、特に詳細や課題等を問う後半部分は文章記述を原則とした。残念ながら調査依頼時に、アンケートの形式や地域性、調査規模等を理由に、数件は承諾を得られなかった。むろん悉皆調査ではないが、多忙な中で重厚な実績と活動への思いの機微がうかがえる、示唆に富む回答をいただき感謝したい。なお、本調査の実施は2021年度の本学学術研究所倫理審査の承認を得ている。

（２）基本情報：事業・施設の開設年、指導者のプロフィール、教室の概要

（ａ）開設年［主に設問３］

開設年不詳の２件を除き、35件の開設時期の内訳は次のとおりである。1968～1980年：７、1981～1990年：３、1991～2000年：８、2001～2010年：６、2011年以降：11。

前身となる事業を「開設」と見なすか等の判断に相違はあるが、1968年開設（２件）等、半世紀の歴史を持つ教室もある一方、新しい教室も増えている。コロナ禍を契機に2020年末に旧小学校校舎を拠点に新設されたアトリエの記述を、参考として次に抜粋する。

「東京でデザイン、作家活動、子どもの WS などをしてきましたが、コロナにより全てがストップ。こんな時こそ活かさなければならないのが芸術なはずが『東京がゆえに』制限されストップしてしまったので、今後いかなる状況でも美術を世の中に提供できる基盤づくりが必須と考え、それを企画立案して由布市に旧小学校を借りました。」

（ｂ）指導者（代表者等）のプロフィール［設問２、３］

指導者像の平均化も困難だが、本調査37件の傾向は次のとおりである。プロフィールの設問も記述形式としたため、ディテールは可能な限り参考資料で補った。

○　作家活動……いわゆる肩書に洋画家、彫刻家、陶芸家、現代美術家、デザイナー等。日本ジュニア展指導者賞、東京藝術大学安宅賞、ハマ展（横浜美術協会）、県展等の受賞者が散見される。個展や地域の芸術祭の主催、出品も多数、見受けられる。

○　当該事業以外の所属……14件。日本美術家連盟と元・日本ジュニア美術協会は各２名。次は各１名（抜粋）。日本美術教育連合、子どものアトリエ太陽の子、現代童画会、春陽会、独立美術協会、横浜美術協会、横須賀美術協会、三重県洋画家協会等。

○　美術系の学歴保有……23件。学科は絵画、彫刻、日本画、グラフィックデザイン、造形、映像学等。大学院、国立教員養成系大学の教育学部、海外の大学を含む。

○　教室・事業運営の学び……講座、研修等の既修・参加は９件。大学の講座は青山学院大学社会情報学部ワークショップデザイナー育成プログラム（２名）、東京藝術大学履修証明プログラム Diversity on Arts Project（DOOR）（１名）。研修は子どものアトリエ太陽の子養成講座、フレネ学校（仏）（各１名）。他に教室スタッフ等の経験として、代々木公園アートスタジオ（３名）、アトリエ創造の泉（１名）。

○　教員免許……判明したものに限られるが中高美術４件、中高社会１件。教員経験者は小学校図工専科教員１名。他、保育士資格保有１件。

○　大学等教歴……大学非常勤講師及び芸大・美大予備校講師は各３名（経験者含む）。

（ｃ）教室・事業の概要（設問５、６）

活動の拠点となる教室の概要（常設の場の有無、対象の年代等）は次のとおりである。

○　常設の教室・施設……28件（75.7％）。自宅アトリエ・工房の開放（14件）、放課後等デイサービスの活用（２件）が含まれる。他に、オンライン開設１件。

○　常設の教室・施設をもたない活動……３件は定期的に幼稚園・保育所を会場に開催している。公立施設は５件のみで、公民館、生涯学習センター、児童福祉施設（児童館、子ども・子育てプラザ）で、同じ市町村の同種施設を複数使用もある。民間施設は４件で、ギャラリー、マンション集会所（以上は各２件）、商店街（１件）。

○　対象……成人クラスを持たず、高校生相当までの子どものみが対象の教室・事業は15件（40.5％）。希望者は継続可能な教室・事業も含まれる。全体的に小学生、幼児（親子を含む）をメインとする例が多い。中・高生を対象とするクラス・コースは25件あった。他に、年代の区切りを設けない方針を掲げる実践もある。

○　作品展……教室・事業所内で一般公開する作品展を毎年または隔年で開催するのは20件（54.1％）である。他に入試合格者の作品展（3件）、保護者参観可能な合評会（2件）や一般のギャラリーでの展示、主宰者が関わる地域のイベントの一環の展示等がある。全国や都道府県レベルの公募展出品は3件、地域の公募展やイベントへの出品が3件である。オンラインでの生徒作品公開も見受けられる。

なお、展覧会を含むイベント・行事はコロナ禍で中止や縮小、オンライン実施をせざるを得なかった、という回答は多かった。積極的なオンライン活用を期待する回答もあった。

（3）活動の目的・教育理念について（設問4）

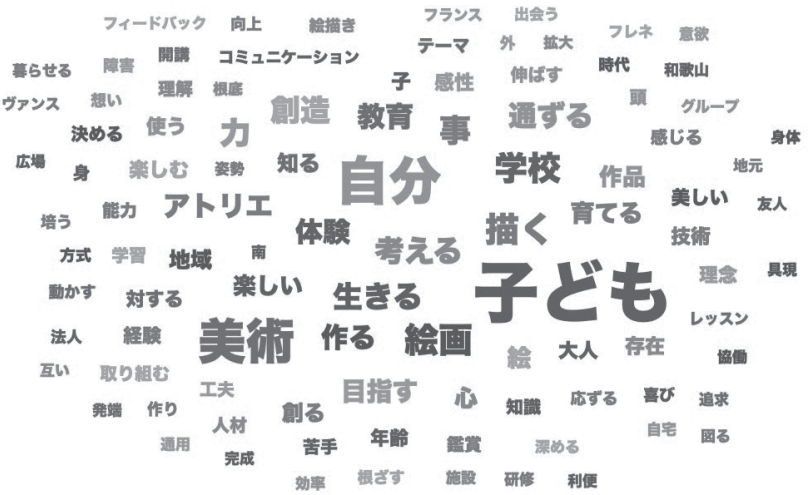

図1　「事業の目的・教育理念」（設問4）テキスト解析によるワードクラウド図

活動の目的・教育理念の記述を求めたところ、総体として、美術の専門性やスキルの獲得より、「生きる力」等の子どもの人間的な発達・成長を掲げる特性が見られた。早稲田大学・李在鎬等による「日本語文章難易度判別システム」（謝辞を参照）を活用し、有効回答36件の設問4の回答を総合したテキスト（総文字数7,239）の形態素解析を行い、［図1］が得られた。語彙リストで上位にある「子ども」「教室」「活動」等を除くと、10語以上表れる語に、描く、表現、造形等の美術関連の表現の他に、「力」（接尾辞と名詞の2種類）、創造、考える、生きる、社会等の一般的な教育理念を想起させる語が並ぶ。このように美術や美術教育に特化した内容に限られず、例えば次の回答に代表されるように、表現のスキルよりも子どもが「自分」で作り、楽しむ姿勢の習得が尊ばれている。

「自分の思い、気持ちを形に表す楽しさ、喜びを満喫することの大事さの実感から、自分で作る、自分が作る、を大事に活動しています。うまく描くこと、作ることよりも、発

達・発育にあわせて、それぞれが自分の力を考え、失敗し、最後まで成しとげ、思いきり表現行為を体験できることが、なによりの目標です。」

一方で基礎の習得や受験指導を掲げる実践は少なくないが、次の回答（抜粋）で語られるとおり、それらの方針は、子どもが主体性をもって作り、楽しむ活動を追求し、子どもの人間的な能力を総合的に高めていく教育目標や教育観と相反するものではない。

「自由に表現するためには、『表現の土台』が必要です。鉛筆や筆等、道具を使いこなすこと、色について知ること、そうした基礎をしっかり学び、本当の意味での『自由な表現』ができるよう導いています。」

「造形教室の中に小学校受験対応のクラスがあることが、不思議に思われることが多いが、小学校受験に必要な能力は総合造形教育の中の一部の能力である、との考えによる。」

なお、今回の中間報告は「活動内容・方法」の部分は割愛した。核となる部分であるが、内容が多彩で総括は困難である。本研究のまとめとなる報告書で掲載することとしたい。受験指導も大きなテーマであり、考察を重ねる必要がある。

（4）学校教育との連携について（設問12）

学校のカリキュラム等との関連を尋ねたところ、16件が「ない」と回答した。しかし事業者と学校教育は、分野や手法等の相違はあれ子どもの美術活動を支える目的は相反するものではなく、次の回答が正鵠を得ていると思われる。

「学校の美術の点数が上がるような指導は行っておりません。『将来の力』になるよう美術教育を行っております。（将来的に成績が上がる事はあると思います。）」

同時に、学校で行わない内容を扱うという回答は4件あった。例えば次の回答がある。

「学校の教科書なども参考資料として使うが、基本的に独自のカリキュラムで進める。また、学校ではやらない専門性のある内容も取り入れている。（例）油彩画　アクリルのモデリングペーストやメディウムを使う。」

出張授業を実施したという回答は16件あった。2年に及ぶ壁画制作等、年度をまたぐ長期の活動も散見される。他に、小学校のクラブ活動や中学校、特別支援学校の課外活動、職場体験への協力が見られ、文化庁補助事業による映画の巡回公演も行われている。美術の授業が苦手な子どもへのデッサン指導（2件）や、教育委員会と連携した不登校児童生徒の支援（3件）も、注目される事例である。

（5）行政・地域組織との連携について（設問10）

選択式で行政等との連携を尋ねたところ、37件より次の回答が得られた（複数選択）。

①市区町村11　②都道府県3　③小・中学校9　④幼稚園・保育園9　⑤高校・私立校3　⑥特別支援学校4　⑦美術館・博物館6　⑧児童館・公民館9　⑨美術教育関係の組織4　⑩子ども関係の地域組織4　⑪その他13

①の市区町村の行政との連携は、都道府県（②）より多く見られ、学校教育との関係についての2（4）のとおり、小・中学校や幼稚園等で定期的に出張授業等を行っている事業者がある。大学ボクシング部の情操教育の一環として年1回の講座を10年以上実施等のユニークな事例もある。⑨は、母校の大学の美術教育研究会や元・ジュニア会（旧・二科ジュニア）委員等が貴重な情報交換の場になっている。

特になし、という回答も目立った。①市区町村は、開設歴が長い事業者の回答が多いが、他の項目は開設の長さに連関する傾向はなく、各事業者の活動方針に依ると思われる。

（6）障害のある子どもに体する特別な取り組み（設問13）

通常通り、特別な取り組みは行っていないという回答は11件、個別対応するという回答は、「通常通り」という回答者と重なる場合も含め、10件であった。一方で、事前の相談や面談をした上で、他の参加者と一緒の制作が困難な場合は断る、障害に関する専門知識がないため受入は難しい、という回答も目立った。他に、幼い頃から十年以上通っている（3件）、障害のある方のクラスを特設（2件）、保育士や心理を学んだ方にスタッフとして入ってもらった、障害のある生徒の個展を開催（各1件）等もある。当初から特別な枠はないが、臨機応変に一人ひとりに対応してきた実績が認められる。他には、特別支援学校や特別支援学級、障害児者施設で出張授業や造形指導を行う事業者が数件ある。

本調査では放課後等デイサービスを営む施設2件と、不登校児童生徒を主な対象とするプログラムを運営する事業者2件が含まれ、参加の促しについて次の回答を得た。

「手伝ってほしいというアクションがあったときにスタッフがサポートしています。」

「上手にできないと落ち込む子や泣いてしまう子もいます。（中略）極力、成功してもらえるよう、スタッフはたくさん手助けをしています。」

障害のある子どもの活動のために、専門スタッフや特別クラスの導入を行わないまでも、きめ細かな指導に必要な人材や、落ち着ける空間の確保は一考の余地があるだろう。

（7）新型コロナウィルス感染症対策について

2020年春に1、2ヶ月程度休室・休止したという回答は7件、少人数化・入会待機は12件、オンライン授業実施や特別のコンテンツ制作は8件であった。例えば次の例がある。

「『在宅陶芸キットの貸し出し』及び『粘土提供』を実施。（中略）5月はオンラインシステムzoomを利用し、非対面陶芸指導を4回実施した。」

感染症対策は徹底して行われ、イベント等の中止・変更（多数）、施設設備の改築（2件）、屋外の活動の増加（2件）一日一組のワークショップ（1件）等が取り組まれた。

同時に、多くの事業者より、少人数制や換気等の問題から、感染症の終息時の参加者増加への対応を危ぶむ回答があった。また、オンラインのイラスト教室を営む事業者（1件）がコロナ禍で参加者が増えたと指摘しており、今後はオンラインの参加拡大も見込まれる。本調査では事前の依頼時に、閉室や移転を決めた事業者も数件あったが（調査実施せず）、コロナ禍は全国の教室の事業内容・方法に甚大な影響を与えたと言えるだろう。

（8）広報の方法（設問9）

本調査の37件は、すべてWebサイトを開設していた。そのうち活動の記録等のブログの併用は18、Instagram 12、Facebook 20、Twitter 16であった。画像を重点的に扱うInstagramの利用数が、flickr（1件）を含めても、FacebookやTwitterの利用数に及ばないのは意外な結果であった。文字情報によるリアルタイムの情報や双方向のやり取りが有益であるのかもしれない。他に、YouTube（2件）の回答があった。

イベント時のチラシやポスター配布、地域の掲示板の活用は多数の回答があり、他に新

聞折り込み広告、活動や事業の開始時の新聞、市等の広報誌の取材を挙げる回答もあった。教室案内サイトへの掲載を行い、他の広告は止めた、という回答も数件ある。デザインとSNS運用、障害のある方への対応に関しては、次の回答が注目される。

「チラシ、SNSは専属のデザイナーさんに制作していただく。餅は餅屋、デザインの力を活用しています。弱視の方に対応するべく紙は薄く色が付いたもの、UDフォント等を取り入れています。」

（9）活動の維持・発展の課題について（設問15）

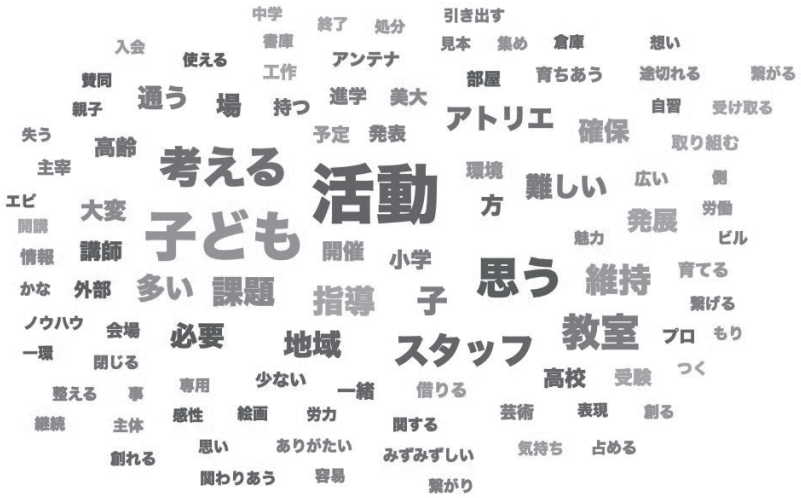

図2　「活動の維持・発展の課題」（設問15）テキスト分析によるワードクラウド図

最後の設問として、活動の維持・発展の課題の記述を求めた。2（3）［図1］と同様にテキスト解析（総文字数4,846）を行い、［図2］を作成した。これも2（3）と同様に、美術の細かなスキルというより、子どもの活動の意味や、指導方針を俯瞰する回答が目立った。課題として主に次の5項目が挙げられる。

①　事業の運営・継続の課題。感染症対策のため、少人数制や設備等の充実が必要となり、入会待機者も増えて運営が困難とする回答が目立った。スタッフの高齢化や若手指導者の育成の課題を挙げる回答は、開設年が長い事業者数件から寄せられた。

②　会場の確保の問題。常設の教室・施設を持たない事業者の場合に会場確保が困難となる課題がある。常設の会場がある場合でも、テナント料の負担が数件挙げられ、上記①に関連してスタッフの高齢化が拍車をかける事例もある。

③　資金面の課題。助成金を得られても費用対効果が求められる、期限がある等の課題が挙げられた。子どもの発達を待つ過程で、美術実践の即座で可視的な評価は難しい。資金獲得が困難であると、参加費や授業料の負担を軽減できないことが指摘される。

④　主宰者・スタッフのライフステージの課題。作家活動・本職と教室運営の両立（3件）、研修・進学等と教室運営の両立（2件）の他、子育てや家族の介護のため教室が運営される平日夕方や週末の運営が難しい（2件）問題が挙げられた。

⑤　地域や学校との繋がりの課題。活動・発表の場や情報の確保、活動に賛同する地域人材との繋がり、美大等の受験・進学に関する情報収集も課題として挙がった。

その他、デジタルによる描画への対応・移行（3件）、障害のある子ども、不登校の状態にある子どもへの対応（3件）、オンラインのワークショップ手法の開発（2件）等の現代的な問題への対応、子どもの「描く」行為・意識の変化を指摘する回答もあった。

3．次年度の研究へ向けて

2022年度は、日本の実態調査をより確かなものにするために、今年度のアンケート調査結果を見直すと同時に、内容を補完する訪問調査を行う予定である。また、今回の研究の比較材料となるドイツの青少年芸術学校におけるアンケート調査とインタビュー調査も合わせて実施し、最終年度となる2023年度のまとめと成果報告へ向けて研究を進めていきたい。

◎謝辞

本研究のアンケート調査「児童・青少年の美術活動」は、次の皆さまのご協力をいただいた（順不同）。おいそがしい中で丁寧なご回答をいただき、これまで一般に明らかにされていない美術実践の魅力をご教示いただいたことに、心からお礼を申し上げます。

造形教室 むむてぃあ、Doi 絵画教室、
子ども絵画教室 アトリエ エピ、象鯨美術学院、
特定非営利活動法人奏海の杜 放課後等デイサービス「芸術のもり」、
キッズ陶芸教室 もぐら倶楽部、アタムアカデミー、
こどものアトリエ アートルーム、一般社団法人 こども映画教室®、
絵画教室アトリエ・エビス（ジュニアコース）、キミコ・プラン・ドゥ、
やと子ども美術教室、アトリエ KURIHARA、レイアートスクール、
児童デイサービス もしもし、特定非営利活動法人 アトリエ・パンセ、
つくらし つくる×くらし、代々木公園アートスタジオ、
株式会社いろだま たまあーと創作工房、絵画教室 アトリエ5、
有限会社アプレットデザインアプレットプラスこどもデザイン造形教室、
成城美術研究所、アトリエ ティエラ アスール、
アトリエろれっと 子供絵画造形教室、絵画教室 アトリエ・ミオス、
アサバアートスクエア 子供デザイン教室、小さな絵画教室 デザイン舎、
造形教室工房なある なあるアートクラブ なあるアートネットワーク、
黒猫の美術教室、陶芸教室 まだん陶房、子どものアトリエ にじのアート、
ファブラボ鎌倉、特定非営利活動法人 市民の芸術活動推進委員会、
㈲プランニング開　アトリエ自遊学校
朴木こども協働アトリエ、匿名1件。

また、本稿2（3）及び（8）のテキスト解析は、研究代表者・李在鎬等による科研費研究（課題番号 25370573）の成果物である「日本語文章難易度判別システム」（http://jreadability.net）を利用した。